チーム４「日本人および外国人に対する言語教育の総合的研究」

学校教育におけるコミュニケーション教育の比較研究

――日独初等中等教育の国語科授業におけるコミュニケーション教育の比較――

岩手大学教育学部　上谷　順三郎

チーム４「日本人および外国人に対する言語教育の総合的研究」（代表・甲斐睦朗）において、発表者は、以下のようなテーマとその活動計画を掲げています。

〔テーマ〕

学校教育におけるコミュニケーション教育の比較研究

――日独初等中等教育の国語科授業におけるコミュニケーション教育の比較――

〔活動計画〕

①教室におけるコミュニケーション研究の整理

②録画資料等も利用した授業の観察・分析

③国語科教育におけるコミュニケーション教育モデルの作成

以下、活動計画のそれぞれについて説明していきます。

①教室におけるコミュニケーション研究の整理

これまで発表者は次のような２つの考察を行ってきました。

「西ドイツ文学教育の動向をめぐっての一考察―受容理論と文学教育の接点を中心に―」（筑波大学教育学研究科編『教育学研究集録』第 12 集, pp.87-96, 1988.10.20）

「西ドイツの文学教育におけるコミュニケーションの問題」（全国大学国語教育学会編『国語科教育』第 37 集, pp.131-138, 1990.3.1）

この二つの考察を通して、まず文学の社会的機能としてのコミュニケーションを指摘することができます。これに関しては、1960 年代以降の西ドイツの社会状況（学生運動など）・教育状況（解放的教育学の台頭など）・文学研究状況（受容美学の提唱など）との関係が重要となります。ここでの「コミュニケーション」は特にドイツ語（言語）の授業に影響を与えました。カリキュラムはもちろんのこと、実際の授業においては使用するテクストの選択の仕方まで変わりました。従来の古典的テクスト（ゲーテとかシラー）が減り、現代作家のテクストが増え、テクストの価値が変化したのです。指導法も、作者の意図を追求するものから、児童・生徒の各自の意見を尊重した話し合いが中心となりました。

このような状況を踏まえて、次のような手順でさらに文献による研究を進めたいと思います。

・日独における「コミュニケーション」概念の検討

ドイツ語圏と英語圏の文献を用いて、歴史的に整理し検討する。哲学・社会学・教育学等が対象分野となる。

・「コミュニケーション教育」の位置づけとその構想案の作成

ドイツ語圏および英語圏での「コミュニケーション教育」を検討し、その問題点を整理する。この段階まで来たら、次の②の段階に入ります。

②録画資料等も利用した授業の観察・分析

ドイツにおける実験を調査したいと思います。初等領域（基礎学校＝日本の小学校の１年から４年）および中等領域Ｉ（その後の６年間）を対象として、文学的テクストを用いた授業を記録し資料としたいと思います。カリキュラムとの関連や指導方法等について指導者の意見も聞いてみたいと思います。文学的テクストを用いた授業におけるコミュニケーションを探る研究です。

③国語科教育におけるコミュニケーション教育モデルの作成

①と②を踏まえて、日本の特に小学校の国語科教育におけるコミュニケーション教育モデル像と実践案を作成したいと思います。教材としては文学的テクストを使用しますが、それは、文学の持つ社会的機能としてのコミュニケーションを生かすためであり、文学的テクストをめぐっての授業のやりとりがコミュニケーションとして成り立つための核となるものです。ことばを通してことばを学習する国語の授業の中で、テクスト（教材）のことばと教師の発することばとそして児童の発することばとを総合的に研究することをめざします。